

a. 原因が明らかでない、いわゆる“湿疹”

臨床的にいわゆる“湿疹”と診断されるが、原因が明らかでない場合、便宜的に臨床所見や皮疹経過、病理所見から、急性、亜急性、慢性湿疹という診断名が用いられる。明確な定義はなく、同じ個体にさまざまなステージの湿疹病変が混在していることが多い。「原因なくして皮疹なし」という言葉のとおり、たとえ原因を特定することができない場合でも、“湿疹”のほとんどはなんらかの外來性物質による接触性皮膚炎と考えられている。

治療はいずれもステロイド外用、抗ヒスタミン薬内服である。

1. 急性湿疹 acute eczema ★

湿疹のうち、臨床的に滲出性紅斑、浮腫、ときに小水疱を伴い（図 7.5）、発症後数日しか経過していないものである。病理学的には明らかな表皮細胞間浮腫、強い真皮の浮腫、炎症を伴う。皮疹が生じて間もないため、表皮肥厚は通常伴わない。

2. 亜急性湿疹 subacute eczema

急性湿疹と慢性湿疹の中間型に位置する。臨床的に紅斑、浮腫を伴うが、急性湿疹と比して多少の苔癬化を伴う。病理学的にも表皮間浮腫は少ないが、表皮肥厚、錯角化などがみられる。

3. 慢性湿疹 chronic eczema ★

臨床的に苔癬化を伴い、発症してから1週間以上経過している場合が多い。表皮肥厚、錯角化が目立ち（図 7.6）、炎症性細胞の表皮内浸潤は少ない。

b. 原因が明らかで、皮疹の特徴から固有の診断名が付されている湿疹

1. 接触皮膚炎 contact dermatitis ★

Essence

- いわゆる“かぶれ”。外界物質の刺激、あるいは外界物質に対するアレルギー反応によって、接触部位に限定して生じる。
- 接触部位に一致して発赤や水疱などの湿疹反応。



図 7.6 慢性湿疹 (chronic eczema)
角層が著明に肥厚し、胼胝状湿疹のようになっている。紅斑ならびに亀裂も生じている。

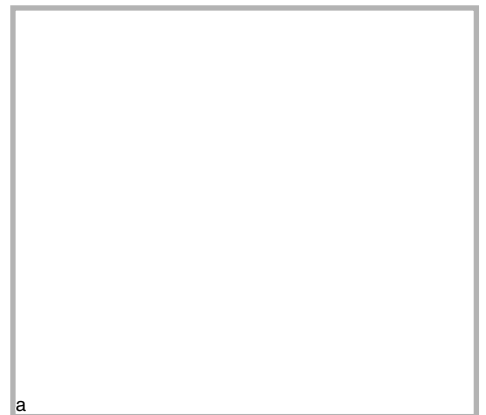


図 7.7 ① 接触皮膚炎 (contact dermatitis)
a: ギンナンを拾った手で顔を触ったことによる、いわゆる“銀杏皮膚炎”。

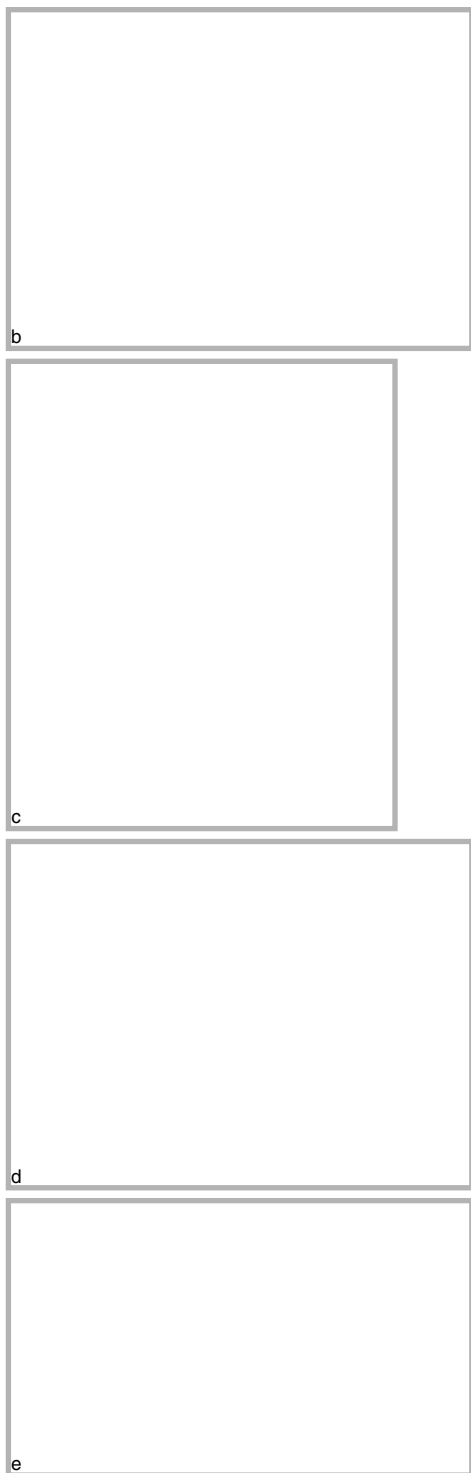


図 7.7 ② 接触皮膚炎

b：衣類によるかぶれ。c：植物を直接手で触れたことによる。d：原因は同定できないが、おそらく石鹸、洗剤などの界面活性剤によるもの。e：生のシイタケを食した後に生じたいわゆる“シイタケ皮膚炎”と呼ばれる全身接触皮膚炎の一つ。瘙痒の強い浸潤性の紅斑。

- おむつ皮膚炎や主婦手湿疹など、固有の診断名も存在。
- 原因物質として、ある種の植物、ニッケルおよび水銀などの金属、灯油など多彩。
- 貼布試験が診断に有用。治療はステロイド外用が中心。接触源を断つことが基本。

症状

原因物質が触れた部位に限局して、紅斑や漿液性丘疹、小水疱、びらん、痂皮などが認められる（図 7.7）。境界の比較的明瞭な湿疹病変で、瘙痒が強い。刺激物が限定した部位に作用しても、搔破によって刺激物が散布された場合には、びまん性に湿疹病変が生じる。刺激が広範囲にわたった場合には発熱などの全身症状が生じたりすることもある。また、刺激が強い場合は皮膚の壊死や潰瘍を形成する。

接触皮膚炎の特殊型

- ① 偽アトピー性皮膚炎（pseudoatopic dermatitis）：刺激が繰り返し与えられると、成人型アトピー性皮膚炎と酷似した症状を示すことがある。
- ② Riehl（リール）黒皮症（melanosis Riehl）：化粧品の成分が光線によってアレルゲンに変換され、著明な炎症は起こさずに色素沈着のみをきたす。近年はまれである（16章参照）。
- ③ 全身性接触皮膚炎（systemic contact dermatitis）：接触アレルギーに感作された人が抗原を吸入するなどして、全身にアレルギー反応をきたすものをさす。シイタケや水銀を抗原とするものがとくに有名である。
- ④ ピアスによる金皮膚炎（gold dermatitis due to ear piercing）：従来、ニッケルなどイオン化しやすい金属が原因となることが多いが、近年は金（gold）使用のピアスによるものが多発している。装着部の難治性硬結が特徴で、ときにリンパ濾胞様構造を形成する（図 7.8）。

病因

一次刺激性接触皮膚炎は、接触源そのものの毒性によって表皮細胞が傷害され、ライソソームや各種サイトカインが放出されることで生じる炎症反応である。一定閾値以上の刺激により、初回接触でも、かつ誰にでも発症しうる。

アレルギー性接触皮膚炎はⅣ型アレルギー反応として説明される（図 3.9 参照）。経皮的に侵入した原因物質は、表皮の抗原提示細胞である Langerhans 細胞によって捕獲され、所属リンパ節に移動し胸腺由来 T 細胞へ抗原情報を伝える。情報伝達を受けた T 細胞はリンパ節で増殖する（感作の成立）。そして、

表 7.2 アレルギー性接触皮膚炎の抗原となりやすいもの

重金属	クロム、ニッケル、コバルト
植物	ウルシ、サクラソウ、ラン、ギンナン、キク、アロエ
食物	トマト、レタス
白髪染め	パラフェニレンジアミン
香料	
医薬品	軟膏、消毒薬
防腐剤	パラベン
合成樹脂	ラテックス

表 7.3 接触皮膚炎発生部位と主な原因

部位	主な原因
頭	シャンプー、毛染め、育毛薬、帽子
顔	化粧品、医薬品、香水、メガネ、植物
頸部	ネックレス、化粧品、香水、医薬品、衣服
体幹、上肢、下肢	衣服、洗剤、金属、医薬品
手足	ゴム、皮革製品、植物、医薬品、洗剤、化粧品、金属
陰部	衣服、洗剤、コンドーム、避妊用薬品

感作成立後に原因物質が再び侵入した際に、感作 T 細胞が活性化して各種サイトカインを放出し、迅速に炎症反応が惹起され皮膚炎を形成する。この反応形式は初回刺激では発症しない点、感作した人にしか発症しない点、一度感作されると微量の抗原であっても発症しうる点が特徴的である（すなわち一定閾値が存在しない）。

植物や化粧品、洗剤、化学薬品など、職場や家庭環境下におけるほとんどすべてのものが接触源となりうる（表 7.2）。

検査所見・診断

原因物質の種類によって皮疹の分布に特徴があり、発症部位や問診から原因物質を推定しやすい。原因物質として発症頻度の高いものを部位別に表 7.3 に示す。原因物質を何種類か推定したら、貼布試験（5 章参照）によって同定する。

治療

接触源を絶つことが基本である。ステロイド外用、痒痒に対する抗ヒスタミン薬の投与などを行う。減感作療法を行う施設もあるが、効果は不定である。

備考

ある特定の者や部位に接触皮膚炎が好発する場合には、特殊な病名が冠される場合がある。

- ①おむつ皮膚炎（diaper dermatitis）：乳児のおむつ装着部位に一致して生じる（図 7.9）。
- ②主婦手湿疹（housewives hand eczema）：水仕事を頻繁に行う者の手に生じる。進行性指掌角皮症（keratoderma tylodes palmaris progressiva）もその一型である。

さまざまな名称をもつ接触皮膚炎

接触皮膚炎はアレルゲンにより、銀杏皮膚炎、ウルシ皮膚炎、サクラソウ皮膚炎、水銀皮膚炎、シイタケ皮膚炎などの診断名が使用される場合もある。

MEMO 



図 7.7 ③ 接触皮膚炎

g：真皮に注入した赤色物質（刺青）に対し、浸潤、痒痒を伴う紅斑を生じている。



図 7.8 ピアスによる金皮膚炎

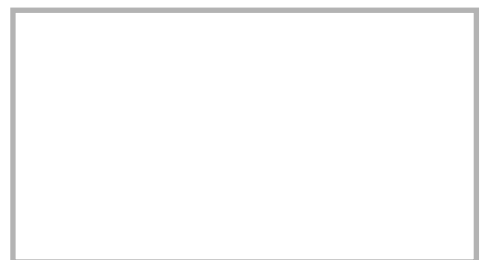


図 7.9 おむつ皮膚炎（diaper dermatitis）



図 7.10 ① アトピー性皮膚炎 (atopic dermatitis)
 a: 小児. 全身の皮疹ならびに掻破痕の混在. b: 成人男性. 顔, 首に強い浮腫. 掻破によるびらん, 浸潤を認める. 成人期症例の典型. c: 成人女性. 顔に強い皮疹を認める.

③異汗性湿疹 (dyshidrotic eczema): 夏季に発汗部位に一致して手掌, 掌蹠に発汗が貯留すると小水疱 (汗疱) や角層がやぶれた皮疹が頻発する. それが刺激となり, さらに湿疹化したものを異汗性湿疹あるいは汗疱状湿疹と呼ぶ.

2. アトピー性皮膚炎 atopic dermatitis ★

Essence

- アトピー素因 (アレルギー性の喘息および鼻炎, 結膜炎, 皮膚炎) に基づく, 慢性の湿疹・皮膚炎.
- 顔面・耳介部の湿潤性湿疹, 乾燥した秕糠様落屑など特徴的な皮疹と分布.
- 白色皮膚描記症陽性, IgE 高値.
- Kaposi 水痘様発疹症や白内障, 網膜剥離の合併症.
- 治療はステロイドおよび免疫抑制薬の外用, 抗ヒスタミン薬内服や保湿剤の塗布.

概説

先天的に皮膚バリア機能が低下し, IgE を産生しやすい素因をもった状態を基礎として, 後天的にさまざまな刺激因子が作用して慢性の湿疹・皮膚炎病変を形成したものである. 日本皮膚科学会では“増悪・寛解を繰り返す, 痒痒のある湿疹を主病変とする疾患であり, 患者の多くはアトピー素因をもつ”と定義している (表 7.4). I 型アレルギー (アトピー素因: アレルギー性喘息および鼻炎, 結膜炎) や IV 型アレルギーを伴うことが多い.

症状

乳幼児期 (2 か月~4 歳), 小児期 (~思春期), 成人期 (思春期以降) の 3 期に大別され, 年齢によって皮疹に特徴がある (図 7.10). いずれも強い痒痒を伴い, 一般に季節によって増悪と寛解を繰り返す. 乾燥しやすい冬季や春先, 夏季運動時に増悪する傾向にある. 多くは乳児期に発症するが, 近年小児期から成人期に初発する患者が急増している.

アトピー (atopy)

MEMO

この言葉は 1923 年に Coca らが提唱した概念で, 先天的に気管支喘息や枯草熱を発症しやすい「異常過敏状態」を意味する. これらアトピー性疾患は本人や家族に生じることが多い. そこで家系的に生じる湿疹である本症はアトピー性皮膚炎という名称が用いられるようになった.